

巽由樹子著

『ツァーリと大衆』

——近代ロシアの読書の社会史——

長 縄 宣 博

強圧的な権力に抵抗する人民の苦難。これがロシアの歴史と現在に関する日本で最も標準的な見方だろう。それは冷戦期の研究がロシアを欧米の自画像の反転として描いてきたことに重大な起源があるが、冷戦の遺産がいまだ根深く残る東アジアの日本にとりわけよく当てはまる。しかしソ連解体から三十年を経て、ロシア史研究自体は大きく様変わりした。ロシアを特殊かつ自己完結的に捉える姿勢が否定され、比較と関係性の観点からロシア史がヨーロッパ史、アジア史、世界史に位置づけられるようになった^①。そしてこの間、ロシアの帝国としてのメカニズムを辺境の研究を通じて解明することが進み、サンクトペテルブルグ・モスクワを中心とするいわば伝統的なロシア史の専門家もその成果を撰取り応答せざるをえなくなっている。

本書もまた、国内外で進行するこのような動態から産出された。本書は、一九世紀のロシアで出版界と読者の構造がどのように変化したのかを描くものであり、その経験は汎ヨーロッパ的な文脈に位置付けられる。また方法論の点でも、出版人の集合的伝記の体裁を取っており、個人が形成されかつその個人も形成に関与し

た時空間を復元しようとする近年の歴史学一般の潮流にも乗っている。本書はロシア史の問題を、どこか遠くの悲惨な話ではなく、われわれ自身の問題として引き受けることを可能にする立論と筆致となっており、幅広い読者を獲得することが期待される。

一九世紀前半の西欧で人気を博した絵入り雑誌は、読書の民主化の深まりを象徴するメディアであったが、それが一八七〇年代にロシアで模倣され普及したのはなぜか。著者は、当時進行していた都市化に伴い、自らの嗜好に基づいて消費活動を行う大衆がロシアにも出現したのだと主張する。これは、「強圧的な権力に抵抗する人民の苦難」といった見方からは死角となってきた中間階層を捕捉し、皇帝と臣民の間の公共圏あるいは市民社会を活写する近年の研究動向に棹差すものである。著者の着目する「読者大衆」とは、企業勤務者や専門職者、商人ら都市の中間層から、町人、職人、労働者といった下層民に至る。そして著者は、彼ら／彼女らの「軽い読書」もまた社会的・政治的転換を準備したのではないかと問題提起する。

では、絵入り雑誌はどのような経緯でロシアに登場し、ロシアの出版界をどのように再編したのか。ここで重要なのは大改革が引き起こした人の移動である。それまで商人身分にのみ認められていたギルドへの加入資格が一八六三年に全身分へと拡大し、農民身分の企業家が多数現れただけでなく、外国人にも商人ギルドに加入する道が開かれる。これによって、旧ポーランド・リトアニア共和国領を介して西欧からロシア帝国に企業家が流入し、一八六〇―七〇年代には、旧来のロシア書籍商から西欧出身企業家の総合出版社へと出版事業者の主力が移った。その中で傑出して

いたのが、ワルシヤワ生まれでバリやライプツィヒで経験を積んだマヴリーキー・ヴォリフ（一八二五—一八三）である。ヴォリフ社はドイツ、ポーランド出身の若い人材を集め、その中からアドルフ・マルクス（一八三八—一九〇四）が一八六九年末から刊行した絵入り雑誌『ニーヴァ』で大成功を収めた。もちろん、これら「外国人」からビジネスの手法を学んで大企業を築く農民出身の成り上がりもいた。その典型が新聞『新時代』の発行者アレクセイ・スヴォーリン（一八三四—一九一二）である。こうして、ポーランドやドイツからの企業家に学んだロシアの出版業が購読者と広告主からの収入に依拠する営利主義的なビジネスになるのに伴って、出版社と作家、そして首都の出版社と地方の書店の間に支配・被支配の関係が形成された。

絵入り雑誌を消費した読者大衆の形成を理解するには、大改革を構成する農奴解放と教育制度改革がロシア社会に何をもたらしたのかを考えなければならない。まず、自発的結社や同じく大改革で生まれた地方自治機関ゼムストヴォを拠点に知識人が解放された農民や労働者に読書を促すことで、識字率が上昇した。そして、農民を含むすべての身分に中等教育機関ギムナジアの入学資格が開かれると、実科ギムナジアの卒業生は高等専門学校に進学するようになり、自身の法的身分の範疇から離れて、法律家、医師、教師といった専門職に就く人々が増加した。一九世紀後半の読者は、いわゆる西欧型中間層たる企業家・専門職者を中心としつつ、より広範に中下層の新しい社会的範疇に属する人々から構成された。彼ら／彼女たちは面白さや好奇心の充足を求める読者であり、知識人と民衆に二極化されない「軽い読書」を楽しむ大

衆となった。この大衆は、ときには出版社に要望を出す顧客であり能動的な消費者だった。

絵入り雑誌と読者大衆という本書の分析対象を明確化した上で著者は、この中間的な領域が、伝統的なロシア史で帝政期の社会勢力と位置付けられてきたインテリゲンツィヤ、民衆、専制とどのような関係を結んでいたのかという考察に進む。本書の後半では、それぞれの結び目に位置した個人の軌跡から時代の変化を読み解くという括目すべき方法が採用されている。まず、インテリゲンツィヤと新しいメディアとの関係では、世襲貴族出身の評論家ヴラジミール・スターソフ（一八二四—一九〇六）が取り上げられる。この人物が文壇でもてはやされた一八六〇年代には、月刊の文芸誌（『厚い雑誌』）と新聞がインテリゲンツィヤの間で公論を形成していた。スターソフは、ロシア固有の民衆文化に根差したりアリズム芸術を国民的に普及させることを目指し、レーピンに代表される「移動派」の美術やムソルグスキーに代表される「五人組」の音楽を熱烈に支援した。しかし一八七〇—一八〇年代に出版業がますます営利化していく中、スターソフは農民出身の成り上がりで『新時代』紙の発行者のスヴォーリンと仲たがいたことをきっかけに、出版界の主流で居場所を失う。その失意の彼に接触したのが、絵入り雑誌『ニーヴァ』だった。『ニーヴァ』は、移動派が先端的芸術だった時期を過ぎ美術界の権威となった時に、大衆の嗜好に応える形で移動派の絵画を積極的に取り上げようになる。スターソフの評論は移動派の評価の確立に貢献してきたから、『ニーヴァ』はスターソフをリアリズム芸術の権威として位置付けた。結果としてスターソフも一八六〇年代の持論

を繰り返すことができ、『ニーヴァ』も評論を自らのコンテンツとすることに成功した。

絵入り雑誌と民衆を橋渡ししたのは、農民身分出身の出版企業家ビョートル・ソイキン（一八六二—一九三八）である。彼は元農奴の父のもとに生まれ、ペテルブルグの古典ギムナジアに進学。一八八五年から二つの印刷所を買取り、九四年には首都で最大級の印刷所を経営した。このソイキン社で最も人気だった絵入り雑誌が『自然と人間』である。それは理性的思考の尊重を謳いつつも、娯楽性を固有の性格とし、似非科学を好んで取り上げた。もう一つの看板雑誌は絵入りの『ロシアの巡礼者』であり、聖職者身分出身の文筆家アレクサンドル・ポボヴィツキー（一八二六—一九〇四）を編集人に迎えた。この人物は、教区司祭の息子たちの多くが父の身分を離れることを選び、世俗社会の新たな教養人として教会と共に地域での福祉活動に取り組むようになるというロシア正教会の変化を体現していた。この雑誌は直接的には、タイトルにあるように、エルサレムへの巡礼者の増加という社会的な現象に應えるものだった。しかしポボヴィツキーはそこには留まらず、ナロード読者が幼時から抱いている信仰心に寄り添い、その維持を肯定することで、拡大する世俗社会の中に信仰と道徳心を保持させることを目指した。したがってナロード出身企業家の出版事業は、必ずしも民衆の科学的啓蒙に専心したのではなく、他の読者たちと同様に楽しみを提供され、その生活文化が尊重されるべき顧客として民衆を捉えていた。

最後に、専制と民間出版業をつないだ人物として宮内官僚ヴァシリー・クリヴェンコ（一八五四—一九三二）が分析対象とな

る。歴代ツァーリがどのように自身の権力を演出したかについては、リチャード・ウォートマンの研究が古典だが、著者はツァーリの描くシナリオがメディア文化を経ていわば屈折する様を捉えようとする。しかも著者は、王族、女優、音楽家、文学者のプロマイドの商品化という一九世紀の汎ヨーロッパ的な文脈を読者に想起してくれる。そのことによって、写真の商品化が崇高な最高権力をいかに大衆の目線（最終的には足元）にまで引きずり降ろしたのかを説得力を持って描出している。それは、王族の私生活への関心の高まりに最も象徴される。一八八一年三月のアレクサンドル二世の暗殺事件の報道は全能のツァーリの身体の損傷を伝え、一八八八年一〇月のアレクサンドル三世の列車転覆事件は、皇帝とその家族の神性を高めると同時に、事故現場の写真はたちまち商品化された。ニコライ二世は自らを「聖なるツァーリ」として表象することを好み、ビョートル大帝の父アレクセイ帝を理想視し一七世紀的儀礼を復活させようとした。一八九六年の戴冠式の公式アルバムを手掛けたクリヴェンコはそれを忠実に演出すべく尽力する一方で、自身の著述家としての立場から民間の出版界にも式典の取材機会を与えた。その結果、ツァーリの肖像をどのように演出するかを選択する主体が出版メディアに移行したことが明らかに。ここから著者は、「世紀転換期に、従来の政治文化の維持が難しくなり、専制が政治的機能不全を起こしつつあったことの暗示だとも考えられよう」と結論付ける。

本稿の冒頭で述べたように、こんなに何か「純粋なロシア史」のようなものが成り立たなくなっているとすれば、本書はロシア帝国の研究にどのような形で貢献し、どのような課題を示してい

るだろうか。本書の最大の貢献は、ロシアの出版界の再編と読者大衆の出現を一九世紀ヨーロッパの文脈に位置付けた点にある。

しかも、西欧とロシアとの人的なつながりが構築される際の旧ポーランド・リトアニア共和国領の役割に着目することで、本書は比較と関係性の両面を捉えることに成功している。帝国が（意図せずして）様々な地域を広域に接合したことで新たな人とモノの流れが生まれたのである。この流れを格段に促進したのが大改革だった。著者はその大改革が帝国の構造に与えた帰結も示唆している。『新時代』紙の発行者アレクセイ・スヴォーリンは当初、ドイツやポーランドから人材を集めたヴォルフ社の支援を得たが、経営が軌道に乗るとヴォルフとの関係は悪化する。一九〇五年革命後、大衆向けメディアが急速に右傾化する中、スヴォーリンは反ユダヤ主義者となり、『新時代』は外国資本への反感や排外的な民族感情を煽った（一八八頁）。つまり、帝国の多様性を広い社会階層で包摂しようとする政策こそが、ロシア人と非ロシア人の競合を促し、ロシア民族主義に道を開くことになったのである^④。ただし著者は、帝国の多様な臣民や地方の主体性に一貫した関心を寄せているわけではない。むしろ本書は、地方（Province, ⑤）が首都と関連付けられてはじめて意味を獲得するかのようないくつかの一九世紀ロシア文学における地方表象に近い議論になっている。例えば著者は、「一九世紀後半の出版業界で、地方の書籍流通機構は、首都に対して従属的な立場に置かれたのだった」と主張する（四三頁）。しかしだからといって、地方に地元の人々の要求を満たす独自の書籍流通の仕組みがあったことを否定することはできない。著者は、絵入り雑誌が新しい文化的規範を定着させた

事例としてファッションに着目し、「カザンのタタール人をはじめとする、都市で生活する非ロシア人の中にも、西欧風衣服に装いを改める者が多く現れた」（七五頁）と言及する。しかし評者が同時期の写真を見る限り、当時のミシン技術に適応しながら民族的な要素を組み込んだ洋装も現れたように思われる。また、一九〇五年革命後に始めたタタール語紙には、そうした時代に適応した帽子（チュベチエイカ）やブーツの類の広告も多い。別途検証されなければならないが、ロシア語の絵入り雑誌や民族語の新しいメディアによって、何を「民族衣装」とするかも標準化されたのではない。帝都発のメディアや価値観が同心円状に均質に普及したかのような著者の前提は、今後見直さなければならなくなるだろう。

中央と地方を二項対立的に捉える著者の視座は、著者が捉えようとする読者大衆の顔を見えにくくもしている。確かに本書は読者大衆の構成とその変遷について、「読者心理」を説明しようとする同時代のアンケートとデータ分析を利用して数字で示してくれる（六二―六九頁）。これは、社会なる領域を把握しようとする学問の登場と軌を一にしたものであり、それ自体は史料として大変貴重であるし、本書の分析対象を明確化するのに役立つ。しかし、著者の二項対立的な視座に加え、史料の性格上、社会学的な画一的指標が採用されるため、ここで取り上げられているヴァトカ県サラプリ、キシニョフ、シムビルスク、ハリコフの多様性が何を意味するのか十分に伝わってこない。しかも、新しいメディアとインテリゲンツィヤ、民衆、専制との関係を論じる各章では、本や雑誌に書かれていることから読者層・購読者を想

像とさせるような論じ方をしている。いわば、ものの影を論じることでその正体を想像させるような形になっている。もちろん、「軽い読書」を楽しむ人々の多様な反応はエピソード的にしか拾えない難しい論点ではある。今後は手紙や日記のようないわゆる「エゴ・ドキュメント」と組み合わせることで読者大衆の感情に迫る史料と方法の模索が必要かもしれない。

とはいえ、多様な出自からなる人々の集合体と書物の相互関係を分析するという「読書の社会史」の方法は、帝国内部のロシア語以外のメディアにも広く応用可能だと思われる。例えば、評者になじみのタタール語の印刷物でも、保守的と思われるがちなウラマー（学識者）は新しい情報伝達に急速に順応し、自分たちの発言の場としてそれを有効活用した。^⑧『ロシアの巡礼者』を編集したボボヴィツキーが、ナロード読者の信仰心に寄り添い、その維持を肯定する姿勢を示したように、ウラマーや社会主義者の青年も、民間伝承の神秘主義的説話や終末論を戦略的に利用した。^⑨近年のロシア帝国のムスリム社会に関する研究では、近代主義者（ジャディード）の登場に象徴される社会の変容を重視する研究に、ムスリム社会の伝統やイスラームの規範的固有性を強調する研究を対置する「党派性」が顕著であり、タタール語の印刷物は前者に属する史料として、必ずしも真摯な分析の対象になっていない。^⑩本書が、インテリゲンツィヤとナロードを対置してきたロシア史の枠組みを克服しているとすれば、他の民族語の印刷物についても柔軟な読みの方向性を指南しているように思われる。

最後に、帝国のリンガ・フランカとしてのロシア語という本書の重要な問題提起について考察してみたい（例えば三〇、六二

頁）。ポーランド人の始めたヴォリフ社の躍進に象徴されるように、ロシア語の書物を商品として対象化する著者の視座は、出版界が特定の民族ごとに住み分けられていたというよりもむしろ、収益を目的に様々な民族が協働しえた側面に今後は光を当てる必要があることを示している。実際、一九世紀初頭に地元の大学で始まるカザンのタタール語書籍の印刷も、二〇世紀初頭になると民間の印刷所が急速に成長し、その中にはハリトノフやエルモラエヴァといったロシア人の経営する印刷所もあった。^⑪しかし他方で、読者大衆の需要の側面を捉えようとする、著者は『ニヴァ』の読者に非ロシア人も含まれていた可能性を示唆するにとどまる（六二頁）。ロシア語の書籍が諸民族の文章語でどのように受容されたのかはそれぞれの専門家によって検証されなければならないといえ、ロシア語と特定の文章語との一対一の関係だけでなく、オスマン帝国にあったような複数の文章語の共同体にまたがる言論空間は可能だったのだろうか。また、ロシア語とその他の民族語は、同時代の世界に流通していた書籍をどのように取り込み、トランスナショナルな公共圏を担っていたのか。本書が切り開いた地平、すなわちロシア史の汎ヨーロッパ的文脈、帝国の共通語としてのロシア語、読者大衆という中間階層は、専門領域を越えた議論に歴史研究者を誘っている。

① Mark von Hagen, "Empires, Borderlands, and Diasporas: Eurasia as Anti-Paradigm for the Post-Soviet Era," *American Historical Review* 109, no. 2 (2004): 445-468.

② 例えば、*American Historical Review* 二〇〇九年三号のラウンドテーブル「歴史家と伝記」を見よ。また、ロシア史を有名無名の男女

- 三十一 各から集へ諸多き Stephen Norris and Willard Sunderland, eds. *Russia's People of Empire: Life Stories from Eurasia, 1500 to the Present* (Bloomington: Indiana University Press, 2012).
- ③ Richard S. Wortman, *Scenarios of Power: Myth and Ceremony in Russian Monarchy*, vols. 1, 2 (Princeton: Princeton University Press, 1995, 2000).
- ④ ①の包摂政策からも排除され、ロシア民族主義の標的にされた人々（*ソビエト人*）から、将来のボリシエヴィキの指導者も生まれる。
- Liliana Riga, *The Bolsheviks and the Russian Empire* (New York: Cambridge University Press, 2012).
- ⑤ Anne Lounsbury, "Provinces, Regions, Circles, Grids: How Literature Has Shaped Russian Geographical Identity," in E. W. Clowes, G. Erbslöh, and A. Kokobobo, eds., *Russia's Regional Identities: The Power of the Provinces* (London: Routledge, 2018), 44-69.
- ⑥ 都市のタタール人における欧米の物質文化の普及については以下を参照: Mustata Tuna, *Imperial Russia's Muslims: Islam, Empire, and European Modernity, 1788-1914* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), 120-123.
- ⑦ Peter Holquist, "To Count, to Extract, and to Exterminate: Population Statistics and Population Politics in Late Imperial and Soviet Russia," in Ronald Grigor Suny and Terry Martin, eds., *A State of Nations: Empire and Nation-Making in the Age of Lenin and Stalin* (New York: Oxford University Press, 2001), 111-144.
- ⑧ Rozaliya Garipova, "The Protectors of Religion and Community: Traditionalist Muslim Scholars of the Volga-Ural Region at the Beginning of the Twentieth Century," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 59 (2016): 126-165.
- ⑨ Agnes Nijluter Keteli, *Becoming Muslim in Imperial Russia: Conversion, Apostasy, and Literacy* (Ithaca: Cornell University Press, 2014). Danielle Ross, "The Nation That Might Not Be: The Role of Iskhagi's Extinction After Two Hundred Years in the Popularization of Kazan Tatar National Identity Among the Tlamma Sons and Shkirids of the Volga-Ural Region, 1904-1917," *Ab imperio* 3 (2012): 341-368.
- ⑩ 代表的なソビエト研究家による批評は、Adeeb Khalid, *Making Uzbekistan: Nation, Empire, and Revolution in the Early USSR* (Ithaca: Cornell University Press, 2015), 10-12.
- ⑪ Kapuagin A.I. *Tatarskaya khana hanara XX veka*, Kazan, 1974. *キプヤギン・アレクサンドロヴィチ*、ロシア人がアラブ文字を解する能力に於ける不信はつぎの通り。例として、ハリタフ社のクルアーンの説権をめぐるタタール語の新聞・雑誌上の議論は、拙著『イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏 一九〇五—一九一七』名古屋大学出版会、二〇一七年、六二—六四頁。
- ⑫ 藤波伸嘉「帝国のメディア：専制・革命・立憲制」秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史』昭和堂、二〇一四年、二四—二六八頁。レベッカ・グールドは「チェチェン・バオセット人」のゲルシア人、ダゲスタン人の間でロシア語を媒介しながら、それぞれの文章語（ダゲスタンの場合はアラビア語）の中で transgressive sanctity なる精神が共有されていたことを論議している。Rebecca Gould, *Writers and Rebels: The Literature of Insurgency in the Caucasus* (New Haven: Yale University Press, 2016).
- ⑬ 磯貝真澄「ヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリム知識人と女性の啓蒙・教育」橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人：大学・学

知・ネットワーク』昭和堂、二〇一四年、一五六―一七七頁。アデ
イブ・ハリドは、*“a transimperial Turcophone public space”*が存
在していると主張する。Adeeb Khalid, “Central Asia between the
Ottoman and the Soviet Worlds,” *Kritika: Explorations in Russian
and Eurasian History* 12, no. 2 (2011), esp. 452–457.

(A5版 二二三頁 東京大学出版会、二〇一九年一月)

税別四八〇〇円)

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授)